

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

アドラー心理学から読む『ラヴェルスタイン』： ソール・ベローによるアラン・ブルームの回想録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2019-09-18 キーワード (Ja): アドラー心理学, 記憶, 目的論, アイデンティティ キーワード (En): 作成者: 朴, 育美 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00007875

アドラー心理学から読む『ラヴェルスタイン』

— ソール・ベローによるアラン・ブルームの回想録 —

朴 育 美

要 旨

小説『ラヴェルスタイン』は、作家ソール・ベロー (1915-2005) が、シカゴ大学教授アラン・ブルーム (1930-92) の生前の要望に応え、ブルームの死後に出版した回想録だ。小説仕立てにはなっているが、主人公のラヴェルスタインはブルームに、回顧録を書くチックはベローとほぼ同一視できる。親友について綴ることは、その差異において自分自身を再確認する作業でもあるはずだが、回想録を書くにあたりベローの頭の中で、何が「記憶」としてせり出してきただろうか。この論文では、自分のアイデンティティを再確認する目的のために、何が記憶として綴られているかに注目し、テキストを考察する。具体的にはアドラー心理学を援用し、ブルームについて書きながら、彼との対比の中で巧に書き込まれたベローのアイデンティティを顕在化させる。

キーワード：アドラー心理学、記憶、目的論、アイデンティティ

1. はじめに

小説『ラヴェルスタイン』は、作家ソール・ベロー (1915-2005) が、シカゴ大学教授アラン・ブルーム (1930-92)¹⁾ の生前の要望に応え、ブルームの死後に出版した回想録だ。ベローの分身であるチックが、ブルームの分身であるラヴェルスタインについて描くという小説仕立てだが、チックとラヴェルスタインは、限りなく本人に近いものとして描かれており、ベローによるブルームの回想録として差し支えないだろう²⁾。ところで、ブルームほどの学者であれば、自身で回想録なり伝記なりを残す選択も十分にあったはずだ。しかし、なぜ彼はその仕事をベローに託したのだろうか。

哲学者らしく、人間が自己を知る限界を熟知するがゆえに、ありのままの自分を後世に残すためには、他者を經由する必要があると考え、非凡な観察力と洞察力を兼ね備えた長年の友人、ソール・ベローにその仕事をゆだねたのか。または、論理を第一言語とする自分のような学者の手によってではなく、フィクションというもう一つの言語空間から描写されることを望んだのか。ベローを媒体に、小説というフィルターを通して、自分では告白しきれない、より赤裸々な自分が、論理や道徳を超越して、まるごと提示される可能性に期待したのか。いずれにして

も、彼らの間には、回想録を託すことができるほどの、強い絆と信頼関係があったことは確かだ。

小説では、回想録の執筆は、メンターを自認するラヴェルスタイン（ブルーム）からチック（ベロー）に課された「主題」であり「課題」であるという。ラヴェルスタインの死から6年経ち、ようやく回想録にとりかかったチックが、いざ原稿用紙を前にラヴェルスタインについて回想する時、あまたの思い出の中から、何が「記憶」としてせり出してきただろうか。読み手は、選ばれた個々のエピソードの中に、書き手のどのような意図を見ることができるだろうか。

ノーベル文学賞をはじめ数々の文学賞を受賞した作家と、『アメリカン・マインドの終焉』³⁾で世界にその名を知られる政治哲学者との長年にわたる友情は、偉大な知性というものが、他者の影響や刺激の中で、共に生まれ、成熟していくものであるということを改めて思い出させてくれる。シモーヌ・ド・ボーヴォワール（1908-86）とジャン＝ポール・サルトル（1905-80）、ハンナ・アーレント（1906-75）とマルティン・ハイデガー（1889-1976）、フリードリヒ・エンゲルス（1820-95）とカール・マルクス（1818-83）の関係もしかり、私たちは自分たちをはるかに超越している、そのような偉大な知性の交流に、「真に深いレベルでの理解」や「永遠不滅の友情」といった一種のファンタジーを抱き、あこがれる。

しかし、知的に深くつながった関係が、ほかの人間関係と比べて純粹無垢であるというわけではない。その証拠に、私たちは、偉大な知性の友情が、しばしば決別や絶交という結末を迎えることも目撃してきた⁴⁾。知的に刺激し合い、理解しあう間柄には、喜びとともに緊張も不可避だ。互いに共有するものが多いゆえに、また誰よりも心を許す間柄ゆえ、相手の偽善も目に付くし、水面下では優越感や劣等感がうごめいているはずだ。勿論、このような緊張感や、優越感と劣等感の往復運動こそが、互いを高め合う原動力でもあり、自己のアイデンティティを確立していく重要なプロセスにもなっているのだろうが。

ところで、ベローは、ブルームのベストセラー『アメリカン・マインドの終焉』の前書きを執筆しているが、そこで彼にしてはめずらしく、ユダヤの出自や自分のアイデンティティについて、かなり饒舌に述べている。80年代以降、高等教育機関を圧倒した、文化相対主義がもたらす他者への無関心や個人主義、アイデンティティの政治の排他性や硬直性を批判する本のまえがきに⁵⁾、自身のアイデンティティのダイナミズムを論じることが必要だったとも理解できる。

しかし、ブルームの本のまえがきで、ブルームについてというよりは、自分自身（や自分の作品）について、かなりの紙面を費やした背景を、また違う角度から考えることはできないか。深い相互理解と信頼をベースに、忌憚のない知的会話を楽しめる友人は、二人で向かい合っている時はこの上ない至福である。しかし、共に社会に向かって発信する時は、自分のアイデン

ティティを脅かす脅威ともなる。だから、相手の思想や議論を検証し発信するプロセスは、おのずと自分自身のアイデンティティを再確認する場となったはずだ。そこには、ブルームのエゴに自身が飲み込まれないように、相手との差異がかき消されることがないように、という無意識の目的もあったのではないか。

同様な視点から小説『ラヴェルスタイン』のテキストを読めば、ラヴェルスタインについて書きながら、彼との対比で巧みに書き込まれた、チックのアイデンティティを読み取ることができるのではないだろうか。親友について綴ることは、その差異において自分自身を再確認する作業でもあるはずだ。論文では、チック自身のアイデンティティを再確認するという「目的」のために、何が記憶として綴られているかに注目する。具体的には、アドラー心理学を援用し、ラヴェルスタインを経由して明らかになる、チックのアイデンティティを顕在化させたい。友人への追憶と喪失のテキストは、ラヴェルスタインの物語であると同時に、チックの物語でもあるはずだ⁶⁾。

2. 理論的枠組み: アドラーの目的論と記憶

日常生活においてのみならず、様々な学問領域において「記憶」は重要だ。記憶は、事実や歴史の構成物として、また経験を再現する手段として、一般的にはより信憑性や客観性が高いものが、価値のあるものとされる。しかし、精神分析においては、事実としての記憶や、記憶の正確性といったことよりも、心的現実としての意味が重要である。過去の自分の経験をどのように記憶し、また何を記憶として思い出すか、そして何を封印しているかといったことに焦点が当てられるのだ。

フロイト（2009）の精神分析は、対話を通じて深層心理にせまることで、クライアントが、これまで抑圧してきた記憶を紐解き、それを言語化することを促す。クライアントが無意識に押し込めてきた記憶を呼び起こし真の原因を認識することが、症状の改善に結びつくと考えるのだ。しかし、フロイトの共同研究者であったアドラーは、無意識の重要性を共有しつつも、抑圧された記憶が今を拘束するというフロイトの決定論に疑問を持ち、やがて異論をととなえ彼のもとを離れた⁷⁾。新しく立ち上げたアドラー心理学は、クライアントの記憶は、症状の原因としてではなく、その記憶を呼び起こす「目的」という視点から分析される。アドラー心理学では、都合に合わせて編集することが可能な記憶は、過去を知る手掛かりではなく、現在のクライアントを知る手掛かりなのだ。

例えば、対人恐怖という症状を持つクライアントがいる。フロイトの精神分析ではカウンセリングを通じて、封印されてきたクライアントの幼い日の記憶を紐解いていく。そして「幼い時に、親との間に十分な愛着関係を築けなかったことが、現在の対人恐怖という症状をもたら

している。」というように考える。症状の原因を過去に結びつける決定論だ。しかし、アドラーの目的論では、そのように過去の記憶と症状を決定的には結びつけない。なぜなら、同じような環境で成長しても、対人恐怖にならない人もいるし、「両親が厳しくしつけてくれたおかげで今の自分がある」というようにとらえる人もいるからだ。

目的論では、症状は過去に原因があるのではなく、今クライアントが何かから目をそらしたくて、または何かから逃れる言い訳としてつくりだしていると考え。問題の所在は「過去」ではなく「今」であると考えアドラー心理学では、カスタマイズされた記憶は、クライアントの現在の「目的」というスコープから検証されるのだ。

確かに、誰かについて語る時、あまたのエピソードの中から、何をどのように記憶しているか一つつまり相手の何を記憶しているか、相手と一緒に過ごした時間の中から、何を「思い出」として思い出すのか—は恣意的であり、そこには語り手の様々な目的が忍び込んでいると考えることができるだろう。次のセクションでは、小説『ラヴェルスタイン』に記されるチックの記憶を目的論の視点から検証し、ラヴェルスタインとの対比において自分自身のアイデンティティを再認識するチックの「目的」を顕在化させたい。

3. 物との関係：欲望と消費

物語を読み進めていて、まず目につくのが、ラヴェルスタインのブランド嗜好とぜいたく品への執着ぶりに関する詳細な記述である。お金がさほどない時代から、アルマーニのスーツや、ヴィトンの旅行鞆、合衆国では入手できないキューバの葉巻、ダンヒルのアクセサリー、純金製のモンブランの万年筆、はたまたバカラやリリックのワイングラス (3) に執着した。書いた本がベストセラーになり、お金の心配がなくなると、さらに消費はエスカレートする。『デイリーニューズ』のコラムニストに「ラヴェルスタインにとって金とは、スピードを出して走っている列車の後部からばらまくもののようなものである⁸⁾ (15)」と評された散財ぶりだ。食事であれ、滞在先のホテルであれ、家具であれ、スピーカーであれ、恋人へ送るBMWであれ、そして死を目前にした病室ですら、こだわりと贅沢に、甚大なエネルギーを使い続ける姿、得意げにセレブと交流する姿が、小説のあちらこちらで描かれる。

チックはそれらの様子を、極力主観を入れずに描写しているようにも見える。ラヴェルスタインには、孤独と忍耐を必要とする知的作業の補完として、消費にエネルギーと情熱をまき散らすアウトレットが必要だったと理解していたのか。または、自分とラヴェルスタインのつながりは、相手の言動への価値判断を超えた、唯一無比のものであるというスタンスだったのか。ラヴェルスタインのカリスマ性は、良くも悪くもあらゆる場面で「逸脱すること」をアイデンティティのコアに据え、チックはそれをありのままに受け入れているようにも見える。

しかし、「記憶」として何度も描かれる「消費者」としてのラヴェルスタインの姿には、チックがラヴェルスタインに抱いていた、自分との違い、ぬぐい切れない違和感を読み取ることもできるだろう。知性がお金になること、そしてその事実、何の抵抗も感じないラヴェルスタインに対する違和感を、チックは「滑稽」という言葉で表現している。

「私には、あの本に注入されたラヴェルスタインの最もまじめな思想が、彼を百万長者にしたということが実に滑稽だった」(14)と言うチックにとって、真理の追求のための思考が、市場経済のヒット商品となり、その著者に莫大な富をもたらすことは、消化しきれない命題だ。そしてそれ以上に悩ましいのは、そのような命題に対するラヴェルスタインの鈍感ぶりだ。ラヴェルスタインは、自分の思想が富をもたらしたことに戸惑いを感じるどころか「懐にはいるやいなや、そのドルをおおかた使ってしまった(14)。」という楽観ぶりだ。

ラヴェルスタインとチックは、同じような問題意識や知的探究を共有してきている。そもそも、ラヴェルスタインが「ベストセラーを執筆できたのも、親友チックのサポートがあったから(19)」だ。二人とも、若い時から形而上学の世界に足を踏み入れ、貪欲に本を読んできた動機は、学問への純粋な好奇心や探究心のみならず、承認要求や自己実現、優越性の追求など様々なものが入り混じっていただろう。しかしその根底には、特にユダヤ人として生まれた二人には、自分とは何か、人間とは何かという疑問に始まった「人間性の追求」というテーゼがあったはずだ。(そして実際そのことは二人のテーゼであり続けている。) 理不尽な憎悪や偏見を克服し、また自分の中にある虚栄心や偽善、罪悪感から解放され、人間とは何かという命題に、自分なりの意味を与えるために知的探究の道に進んだのではなかったか。

ところが、哲学者として歴史上の最高の知性に精通し、知の巨人とし世間から尊敬を集め、また話をしている時、講義をしている時には、あれほどまでに魅力的なラヴェルスタインが、一方でこれだけ資本主義の俗っぽい欲望と一体になれるのはなぜか。鋭利な刃物のごとき批判の目を持つラヴェルスタインが、自分の書いたものや言っていることと、自分の虚栄心の間にある、明らかな矛盾に無頓着なのはなぜか。欲望をむき出しに、過剰な消費にエネルギーを費やし、それを周りの人に見せつけることは、ラヴェルスタインの生活の重要な一部だ。

しかし、最高級のホテルに滞在し、高価なブランド品を身に着け、ひっきりなしに消費するラヴェルスタインの描写から伝わってくるのは、彼が本当にそれらのものを楽しんでいるのだろうかという疑惑であり、チックが感じていただろう疲弊感だ。何かを手に入れたらそれを十分楽しむのではなく、もう次の欲望を探している。エネルギーに追いかけているのは、次のターゲットだ。

一方チックは、ラヴェルスタインのように、欲望と一体になっては消費を楽しむことができない。世界が輝いて見える時にチックを襲うメランコリーや「輝かしい生命が凝集した時間に遅れずについていくことなんてできない」(38-9)という疎外感や孤独感の源にあるのは、欲望

に牽引される消費社会に対する疲弊でもあるだろう。だからチックは、「自然石で建築された家屋、古いカエデとヒッコリーの木々 (99)」に囲まれたカントリーハウスで過ごす時間を必要とする。

「遠隔地と孤独 (101)」を求めて訪れる自然豊かな田舎は、過剰なエネルギーと欲望に急き立てられる都会の時間とは違って、その場にとどまりながら、自分と向き合う時間をくれる。チックは、そこで内省し、自分の孤独と向き合いながら、思索する時間が必要だったのだろう。また、「神様はとても早い時期に、私に顕現した (91)」というチックは、言語には収まりきれない「個人的な形而上学」の世界の住人でもある⁹⁾。チックは自らの超越的経験について、幾度となくラヴェルスタインにも理解してもらおうと試みた。しかし、論理と理性を超えた超越の世界を、ラヴェルスタインが理解することはなかった。

むしろ、ラヴェルスタインは、チックが「個人的な形而上学」に溺れすぎていると考え、彼をリアルな世界に引き戻そうとする。しかしチックにとって、自分の外に広がる超越世界は、内省や思索と共に、彼のアイデンティティを支えるもう一つの空間であり、論理や理性の力でそれを封じ込めてしまうことは、自己喪失にも等しかっただろう。彼には「生まれながらにして持っている形而上学的な水晶を、危険な外科手術で取り除くつもりはなかった (98)」のだ。

一方、「逸脱」をアイデンティティのコアに据えるラヴェルスタインは、自分の俗人ぶりにおいても逸脱を目指しているようだ。ブランド品をスマートに着こなせない自分を演出し（エルメスカエルメネジルド・ゼニアのラヴェルスタインのネクタイには、たばこの火の焦げ跡が点々とついていて (41)、周りから眉を顰められるようなマナーの悪さを自慢こそすれ、恥ずかしがるどころか、正そうともしない。「別に大真面目でセレブな生活やブランド品に執着しているわけでもないのだ」と自分の俗人ぶりを、ユーモラスに矮小化してしまいたいとの思いもあったのだろうか。

買ったばかりの四千五百ドルの、ランバンのジャケットにつけたコーヒーのシミも、いつものことと笑い飛ばしてしまおうとする。しかし、ラヴェルスタインの気持ちを知りながらも、チックはそれを「滑稽な出来事としては取り扱わなかった (41)」。そこには、ブランド品を手に入れる時の、十分の一のエネルギーも、それを慈しむことに使えない親友に対する、怒りにも似た失望があったのではないだろうか。

勿論、チック自身も、生身の人間であり物欲や煩惱から自由なわけではない。また、最高のものを求めるエネルギーや最高のぜいたくといったものが、芸術には欠かせないことも承知している。しかし、ラヴェルスタインの俗人ぶりをその破天荒な人格の一部として受け止めつつも、チックの記述の端々に、ラヴェルスタインと自分の消費やものに対するスタンスの違いが書き込まれているように思われる。そして、消費や物に対する二人の隔たりは、根本的な人間関係のとらえ方の違いにも通じているようだ。次のセクションではアドラー心理学の「縦と横

の関係」の概念を援用し、チックが書き込んだ、人間関係における二人の差異について考察したい。

4. 人間関係：縦の関係と横の関係

ラヴェルスタインとチックは同じ大学で教えている同僚でもある。しかしチックは自らを「決して教授ではない (63)」という。自らを教育者と定義することを拒んでいるのだ。その一方で、ラヴェルスタインについては、「教育者」としての側面を強調し、詳細に書き込んでいる。勿論、ラヴェルスタインが抜きん出た教育者であることは自他ともに認める所だ。いったん教壇に上がって講義すれば、だれも退屈させず、才能ある学生を魅了し虜にする。ただ、チックが、ラヴェルスタインを教育者と定義する最大の理由は、教える内容の豊かさというよりは、人間関係の築き方の方にあるようだ。

チックの描写から、ラヴェルスタインと学生の関係が、絶対的な縦の関係であることが伝わってくる。ラヴェルスタインのサークルに加わることを許された、選ばれし学生は、「退屈でない理性によって統治され、多様性や多彩さでいっぱいの高次の生活 (26)」に導かれる。そして「彼のクラスの学生、彼のチーム、彼の弟子、彼のクローン (56)」は、ラヴェルスタインが、モーゼとしてまたソクラテスとして、「知性の約束の地」へ導いてくれるかの如く、彼を崇拜し、神格化している。

また、ラヴェルスタインは学生たちのプライベートにも介入し、指南し、その生活全体を把握し、世話をやき、教育する。その結びつきは卒業後も続き、政府の高官として活躍する卒業生から、アドバイスを求める電話がとぎれることはない。最新の情報—政治からゴシップまで—をアップデートしながら、ラヴェルスタインは、自分が、あらゆる人に、あらゆることについて、的確に教えることができると確信している。彼は「教育者だったから (173)」。

一方、チックはどうだろうか、彼が自分を、教授や教育者として自覚できないのは、まさにこのような確信が持てないからではないか。自分がだれかの人生について重要なことを決定し、最善の答えを準備できるとは思えないことが、彼に教育者ではなく、小説家というアイデンティティを選ばせているのではないだろうか。教育者を自認することは、縦の関係から理性や知性を根拠に、他者を導こうとすることだ。しかしチックは、知性や理性で断定するには、世界はもっと複雑で不可解であると感じていたのではないだろうか¹⁰⁾。

ラヴェルスタインが縦の関係を築いているのは、学生との間だけではない。それは親友であるチックに対しても変わらない。「彼は自分のことを私の教師だと自認していた (173)」とチックが回顧するように、年上であるチックのことも、自分の弟子のように思っていたふしがある。現にこの回顧録も、「課題」としてチックに託したのだ。しかしその反対に、チックがラヴェ

ルスタインに回顧録を託すことはできない。「彼は私のメモワールなど書いてくれないだろう。せいぜい葬儀で読んでくれる弔辞一ページが関の山だ (14)。」という非対称な関係だ。

親友との関係ですら、縦の関係をベースにしていることは、パリで二人が一緒に買い物をした時のエピソードからもわかる。ラヴェルスタインは、チックが退屈しているのもお構いなく、長時間の自分の買い物につきあわせ、眼鏡屋で贈り物を買うついでに、チックにもケース入りの眼鏡をプレゼントする。ラヴェルスタインにとっては、全く悪気のない行為なのだろう。しかしそこには、縦の関係を前提とした、ラヴェルスタインの甘えを見ることができる。

通常、私たちは、上下関係と対等な関係を分け、友人とは横の関係、目上の人や上司などに対しては縦の関係といったように、二つの関係を別々に使い分けていると思っている。しかしアドラーは、人間は、横か縦か、一つの間関係しか持てないと指摘する。つまり、人間関係を横で捉える人は、相手が誰でも、比較や競争の対象として見ないのに対して、人間関係を縦で捉える人は、全ての人間関係を比較の軸で捉え、相手をコントロールしようとする意識に束縛される。

アドラーの理論を援用すれば、ラヴェルスタインにとって、人間関係はすべからず、彼の優越性を頂点にした、縦の関係をベースにしたものである。人間関係は縦であり、そのような人間関係を維持するためには、常に優越性のパフォーマンスで相手をコントロールしなくては行けない。ブランド品や豪勢な生活スタイル、破天荒な言動は、縦の関係における自分の優位性のための小道具ともいえそうだ。

またチックは、ラヴェルスタインとパートナーである「ハンサムな中国人プリンスのニッキー (141)」との関係も、縦のものとして書いている。スイスのホテル専門学校で学ぶ若き青年ニッキーは、「故郷のシンガポールから取り寄せたカンフー映画を、午前四時まで見る (5)」のが習慣だ。ラヴェルスタインにとって、エロスや情熱は、最も重要なテーマであり、知性と同じくらい不可欠なものだ。ニッキーに送られる高額なプレゼントの数々－ジャン・フランコ・フェレのスーツから特別仕様のBMWまで－は、彼なりの感謝と愛情の表現方法だったのだろう。

しかし、このような一方通行の贈与関係は、人間関係の根本を規定してしまう。というよりも、縦の人間関係に同意している関係でなければ、このような一方的な贈与の関係はあり得ない。ラヴェルスタインは、「父親と息子のようなものさ (69)」といているが、根本的なところで、二人の関係は対等ではない。勿論、二人の間に、他者が介入できない絆があったことも確かだろう。死のその瞬間まで、彼はニッキーを必要とし、またニッキーも、最後までラヴェルスタインに献身的に付き添った。しかし、パートナーとの関係もまた縦のものだったといえるだろう。

一方小説の中では、チックがカオス物理学者である現在の妻と別れ、ラヴェルスタインの弟子である若い女性と再婚するプロセスが描かれているが、彼がパートナーに求めるのは、エロ

スや情熱に収斂されない、対等に支え合う人間関係だ。前妻との離婚に至るまでに、彼が理解を試み、苦悩し、歩み寄ろうとした姿や、後半にかなりのページを割いて描かれた新しい妻との絆は、チックがラヴェルスタインとは対称的に、横の関係で人間関係を築こうとした姿が書き込まれている。またチックが唐突に語る、ごみ出しのエピソード（86）も彼の人間関係へのスタンスを教えてくれる。

ある日チックは、マンションの階下まで、不用になった段ボールを運んでいるところを同じマンションの住人（詩人兼翻訳家）に見とがめられ、いったいなぜ管理人にやらせないのかと尋ねられる。チックとしては仲の良い管理人の手を煩わせたくなかっただけなのだ。しかし、階級で人と仕事を分断することが当たり前になっている住人は「あなたは、管理人から十分にリスペクトされていないのではないか」といぶかしがり、チックをいらだたせる。詩を書き翻訳をする知性はあっても、管理人へのチックのシンプルな思いやりを理解することは難しいようだ。

この住人同様、多くの人は一チック自身も含めて一社会的地位を手に入れるのと引き換えに、横の関係で人間関係をとらえる感覚を鈍らせていくのだろう。しかしチックは、「お人よし」や「ナイーブ」といわれながらも、そのような感覚を失いたくはないのだ。どれだけ長い間大学で教鞭をとっていても、彼のアイデンティティが、教授や教育者ではなく、小説家であり芸術家なのは、縦の位置から導くのではなく、横の位置から観察し、描写し、影響していきたいという彼の思いと連動する。

ではなぜ、このような根本的な相違点にも関わらず、二人は長年にわたってかけがえのない親友であり続けたのだろうか。次のセクションでは、その点について考察してみたい。

5. 二人の友情とユダヤ性

小説ではチックとラヴェルスタインは友人であり親友であると表現されている。しかし、二人の関係にはそのような言葉ではとらえきれないニュアンスがある。チックは、「我々は親友だった（94）」と何度も書いているが、あえてそのように二人の関係を定義するのは、通常の友人関係とは少し違うという認識があったからだろう。例えば二人の関係についてチックは「私は言われたことをすっかり把握して、彼について行くことができたから、とても満足している（94）」とラヴェルスタインから言われた、と書いている。先ほどのセクションでも考察したように、通常の親友のように対等とは思えない部分もある。

しかしその一方で、普通の親友以上に深い情で結ばれた関係でもあった。同じ通りに住み、頻繁に会い、特にラヴェルスタインの病気がわかってからは、ほとんど毎日会って話をし、それでは飽き足らず電話でも話し、一緒に買い物をし、病室に付き添う。離婚の相談から性欲に

ついてまで、「自分の欠点や、どうしようもない恥ずべき秘密 (95)」を全て告白できる関係には、仲の良い姉妹のような近さを感じる。

自主的に選んだ関係である友情が、ある種の契約状態であるのに対して、肉親の情は存在をそのままで受け入れることを前提とする。二人の絆には、知性を介したつながりを超える、肉親の情にも似た受容があったようにも思われる。そしてそのような絆について理解するには、やはり彼らのユダヤという出自に立ち返らなければならないだろう¹¹⁾。

改めて、彼らの出発点には、「あんなに多くの憎悪と生存権の拒否 (179)」というスティグマを背負った、ユダヤ人としての自分があったことは確かだろう。自分自身の存在という、きわめて私的に始まった問いは、やがて人種や宗教、人間とは世界とは何かを問う、より普遍的な哲学的関心へと拡散していったのだろう¹²⁾。やがて、一人は、学者、教育者という立場から、もう一人は小説家という立場から、世界へ発信していったメッセージは、必ずしもユダヤを前面に押し出したものではなかったかもしれない。しかし、どれだけそれについて沈黙している時も、ユダヤの出自とその経験—チックの言葉を使うならその映像—は彼らの中から消えることはなかったはずだ。

小説の中でも二人が、時には真正面から、時には唐突に、ユーモアやアイロニーをこめて、繰り返しユダヤについて言及する様子が描かれている。ユダヤ人特有の顔つきをしたラヴェルスタインの寝顔を見ながら、チックは「彼の一風変わった知性を入れる、より風変わりな容器を想像できなかった (173)」と述べているように、彼らのユダヤという出自と卓越した知性の間には、切り離すことができない連続性があるのだ。

勿論、偏狭なステレオタイプを嫌った二人は、紋切型のユダヤ人アイデンティティに拘束されるつもりはさらさらなかっただろう。しかし同時に彼らは、ユダヤという束縛から自由になるためには、逆にユダヤについて考えぬかなくてはならないことも熟知していた。彼らが拒絶したのは、準備された言説に身をゆだね、自分のオリジナリティを喪失したところから、自由やアイデンティティについて語るポリティカル・コレクトネスの偏狭さだ¹³⁾。

ユダヤ人であることを自分のアイデンティティのダイナミズムに取り入れながらも、そこに拘束されることを拒否した二人。彼らにとって、建前を取り払ったところで、「アメリカの言語を使ってユダヤ人の生活を送ってきた (167)」葛藤についてのみならず、ユダヤの中にある排他性、屈折した優越感と劣等感、政治や文学、ゴシップからエロスまで、あらゆる話題について、自由奔放に議論し、笑いを共有できた関係は、「親友」という言葉では収まり切れなかったかもしれない。

一見派手な社交関係を享受しているように見えるラヴェルスタインだが、実は「ほんの一握りの人間しか信頼 (59)」していない。そしていったん信用した人との付き合いは、往々にして非常に濃密なものだった。そこには実際の肉親との、絶縁にも近い関係を埋め合わせる意味

があったのではないか。ラヴェルスタインは父親について「クレージーなノンストップのファミリーオペラで、発狂気味の叫び声で子供たちを支配する、しょうもない暴君 (61)」と、その憎悪を隠そうとしない。しかし、彼が憎む父親の姿は、多くの取り巻きの中心で過剰なエネルギーを爆発させている、ラヴェルスタイン自身の姿と妙に重なり合う。

そのような視点から見れば、ラヴェルスタインの父親への憎しみには、自分に内在する父親似のオルターエゴや、無条件に自分を支配するユダヤという出自への反発が複雑に混じりあっていたようにも思われる。ならば死を目前にしたラヴェルスタインが到達した「人の血統オリジンを取り除くことは不可能である、ユダヤ人としてとどまるのをやめてしまうのは不可能である (179)」という結論は、父親という自分のオリジンに折り合いをつけ、ニヒリズムを捨て、ユダヤ人の経験に一体化していくジェスチャーだったとも解釈できるだろう。

「並み」であることを嫌悪し、「逸脱」を生きたラヴェルスタインが、最後に「ユダヤ人はユダヤ民族の歴史に深い関心をもつべきだ (179)」というオーソドックスなコミットメントに回帰し、「二十世紀に虐殺された何百万人もの人々 (168)」の連続性の上に自分を位置づけたことは、少なからずチックに衝撃を与えた。ラヴェルスタインの死後も、チックは何度も二人の間で交わされた、ユダヤについてのやり取りを反芻し、考えをめぐらす。そして、もはやラヴェルスタインとこのことについて—そして他のどんなことについて—議論できない悲しみに、圧倒されるのだ。

ただ、チック自身はまだ、アイデンティティのダイナミズムに決別し、一つのコミットメントに収斂する準備ができていないわけではなさそうだ。「誰かが非常に大事なことを私に伝えてくれても、私はそれをじゅうぶん理解しているのだから、それを完全に取り込むことはお断りする (235)」というのが、チックのスタンスだ。そしてラヴェルスタインもきつと、そんなチックのスタンスを理解していることだろう。二人の友情の真骨頂は、その差異を受けとめ、楽しむことにあるのだから。

6. 結び

小説の中で、チックは「ある程度の自己関与もなしにその人物を描写することはできないから、余白に私が存在することをどうぞおおめに見てほしい。(129)」と書いている。その言葉通り、登場人物として、また語り手として、チックはこの小説のもう一人の主人公として存在する。しかしこの論考で注目したのは、そのような顕在的に提示されるチックではなく、ラヴェルスタインの描写を通じて明らかになる、潜在的なチックのアイデンティティだ。

まず、アドラー心理学の目的論の概念から、チックによって選ばれたエピソードや記憶の根拠を「一番印象に残っているから」とか「最も彼らしいエピソードだから」といったような原

因論的に捉えるのではなく、書き手であるチックの「目的」からとらえなおした。するとそこには、親友との差異に、自分自身のアイデンティティを書き込もうとする、チックの潜在的な目的を読み取ることができたように思う。知的に、経験的に多くのものを共有する親友は、この上ない至福であると同時に、自分のアイデンティティを脅かす脅威にもなる。だから、親友について書く回想録は、はからずも自分のアイデンティティを検証し、再確認する場ともなったはずなのだ。

論考では、親友との差異において、潜在的に書き込まれるチックのアイデンティティを顕在化させ、ものや消費、人間関係の築き方を軸にした二人のスタンスの違いを概観した。と同時に、そのような差異にも関わらず、彼らを生涯親友として結び付けた絆についても考察し、その絆が、彼らのユダヤという出自とは切り離せないものであることを議論した。

ラヴェルスタインの死後を描く小説の最後は、エピローグのようになっていて、チック自身が生死の間をさまよった出来事をハイライトに、新しい妻との静かだが安定した生活への移行が描かれている。ラヴェルスタインの熱心な崇拝者であり弟子でもあった妻は、今も心の中でラヴェルスタインに向かって語り続けるチックの孤独を、誰よりも理解し、思いやることができる人だ。若い彼女のためにも、自分はまだ生きなくてはならない。生きなくてはならない以上、ラヴェルスタインを「思い出」にしてしまうことはできない。そして、「そうやすやすと死に渡してたまるものか！（233）」とチックが思っている限り、ラヴェルスタインは生き続けるのだ。

注

- 1) プラトンとルソーを専門とする政治哲学者。著書『アメリカン・マインドの終焉』（1987）は世界的ベストセラーになった。
- 2) 主人公のラヴェルスタインとチックのみならず他の主要な登場人物も実在の人物をモデルにしている。詳しくは鈴木元子訳『ラヴェルスタイン』（2018）あとがきを参照。
- 3) 原題は*The Closing of the American Mind*。80年代のアメリカ大学教育を批判した本書は、文化相対主義や個人主義の蔓延が、他者に対する無関心や不寛容を助長し、大学における自由な議論を死滅させていることを指摘。ギリシャ哲学のような伝統的な人文科学教育の重要性を訴えた。当時同僚としてカゴ大学で教鞭をとっていたペローは、この本の出版に深くかわかり、その前書きを執筆している。本稿における引用は菅野（2016）訳を使用。
- 4) 例えばフロイト（Sigmund Freud 1856-1939）とアドラー（Alfred Adler 1870-1937）やユング（Carl Gustav Jung 1875-1961）、サルトル（Jean-Paul Sartre 1905-1980）とカミュ（Albert Camus 1913-1960）など。

- 5) ベローは、「あなたがどこの出身かを言ってみたまえ、そうすればあなたが何者かを教えよう」といったアイデンティティの政治の偏狭さを強く拒絶している。そして、歴史と文化に全面的によりかかることから解放されれば、真に自由な議論は、あらゆる時代と場所でよみがえらせることができる、というブルームの主張を「とても真剣に理解しているし、強く心を動かされる」と書いている。
- 6) Freeze (2003) も、ラヴェルスタインについてのチックの語り、ラヴェルスタインの人物像を伝えるのみならず、チック自身の人物像を伝えるという、二人の人物像の相互依存性を指摘している。
- 7) 半田 (2011) は、『ラヴェルスタイン』の分析において、ブルームとベローの心理学批判の焦点の違いについて言及している。ブルームが「生物学上の基礎づけで、精神的な現象を説明しようとしている点」を批判しているのに対し、ベローは、「原因は無意識に隠されていると前提している点」を批判していると指摘している。ベローの精神分析批判は、フロイトの決定論や原因論を批判したアドラーの問題意識と重なると思われる。
- 8) 作品からの引用の日本語訳は、全て鈴木 (2018) 氏の翻訳を使用。
- 9) ソール・ベローと魂や超越については、詳しくは町田哲司 (2006) を参照。
- 10) ソール・ベローは、『アメリカン・マインドの終焉』の前書きで、「詩人や小説家は、決して人類の立法者や人類の教師にはなれないだろう。もし芸術家の企ての目的とは何かを説明しなくてはならないとしたら、私はこう言いたい。詩人—芸術家—は、人間に世界を違ったふうに見るようにしむけ、彼らを固定した経験の様式から改心させることによって、新しくものを見る眼を人間に与えるべきである (7)」と書いている。
- 11) 片淵 (2007) は『ラヴェルスタイン』の考察で、「ユダヤ人としての自己探求を巡る主題的関心」が「ユダヤ系アメリカ作家によって書かれた作品」の無視できないポイントとであると指摘している。
- 12) 個人的な不条理な体験を普遍的なテーゼにまで昇華させていくプロセスを、フェミニズムは「personal is political」というスローガンで、またカミュ (1973) は「自分が異邦人であるという意識にとらえられた精神の最初の進歩は、この意識は万人とわけあっているものだけということ、人間的現実、その全体性において、自己からも世界からも引き離されている距離に悩むものだけということ」を認める点にある。」と述べている。
- 13) これはチックの助言でラヴェルスタインが書いた「ベストセラー」(現実には『アメリカン・マインドの終焉』)のテーゼの一つである。

参考文献

アドラー・アルフレッド『人生の意味の心理学 上』岸見一郎訳、アルテ、2010年。

_____『人生の意味の心理学 下』岸見一郎訳、アルテ、2010年。

_____『個人心理学講義』岸見一郎訳、アルテ、2012年。

片淵悦久「アメリカのユダヤ人、その生と死—『ラヴェルスタイン』」『ソール・ベローの物語意識』p249-

- 269 晃洋書房、2007年.
- カミュ・アルベルト 「反抗的人間」『カミュ全集』p17-25 佐藤朔 高島正明編、1973年.
- 半田拓也 「Ravelsteinのメッセージ」『福岡大学人文論集』43.1 1-25、2011年.
- フロイト・ジークムント 『精神分析入門Ⅱ』懸田克躬訳、中央公論新社、2009年.
- ブルーム・アラン 『アメリカン・マインドの終焉—文化と教育の危機 新装版』みすず書房、菅野盾樹
訳 2016年.
- ベロー・ソウル 『ラヴェルスタイン』鈴木元子訳、採流社、2018年.
- 町田哲司 『ソール・ベローⅡ—“Soul”の伝記序説』大阪教育図書、2006年.
- Bellow, Saul. *Ravelstein*. New York: Harper, 1979.
- Bloom, Allan. *The Closing of the American Mind*. New York: Simon & Schuster, 1987.
- Freeze, Eric. “Reading Ravelstein,” *Saul Bellow Journal* 19.2 Fall 2003, 19-30.
- Machida, Tetsuji. *Saul Bellow, A Transcendentalist*. Osaka Kyoiku Tosyo, 2010.

(ばく・いくみ 外国語学部准教授)